

蓮池 薫さん

in 多摩キャンパス詳報

3月14日——

北朝鮮による、長い、あまりにも長い24年間の拉致生活ののち、
劇的な帰国を果たしてからちょうど5ヵ月めの日である。

拉致被害者5人が羽田に降り立ったのは昨年10月15日だった。

帰郷先の新潟県柏崎市をはじめて離れ、

蓮池薫さんが夫人とともに真っ先に足を向けたのは母校・中央大学——

法学部の3年次前期3ヵ月だけを過ごした多摩キャンパスだった。

正門から車で入り、多摩都市モノレールで下校するまで、

5時間の光景と発言詳報。

本誌編集室十学生記者取材班

1号館からペデ下を歩いて図書館
へ向かうあたりで歓声がわいた。

「蓮池さんじゃないの」

「マジだよ、おい」

それがさざ波のように伝播した。

弁当を台車で運んでいたおぼさんが
蓮池さんの手を握って、「がんばっ
てください」と、祐木子さんにも声
をかけた。すこし後ろを歩いていた
兄・透さんもつかまった。

春休み中には、学生の姿が多い。
前夜のテレビニュースで知ったのだ
ろうか。しかし、多くは「ビックリ」
だったようだ。

4月からの薫さんの柏崎市勤
務の前に、「北朝鮮に拉致され
た中大生を救う会」（渡部一実
代表幹事）の招きで実現した母
校訪問である。「静かな形で」
という薫さんの意向と警備上の
問題もあって、直前まで公表さ
れなかった。3泊4日の日程。
前日、柏崎から上京し、安倍晋
三内閣官房副長官らと面会して、
2日めのこの朝——。

「お帰り、長かったな」

予定の午前11時より早めに、総合

政策学部11号館前に車が着いた。長
内了・法学部教授が出迎える。

「お帰り！ 長かったな」

98年、蓮池さんの「学籍回復」方
針を決めた当時の法学部長である。

夫妻の肩を抱くようにして、「大変
だったね」と言葉を重ねた。

目の前に、青年像。「思い出ある？」
と祐木子さん。「うん、駿河台の、
休講板のところにあつたな」と薫さ
んは像を仰いだ。

多摩移転の78年、その年の7月末
に拉致事件は起きた。当時法学部3
年だった蓮池さんが多摩にあつたの
は前期3ヵ月間にすぎない。当然、
駿河台の記憶が深いのである。

桜広場には、これも駿河台名残の
旧正門。まだ蓄の下を歩きながら、
表情がなごむように見えた。「いい
よねえ。キャンパスにこう、自然が
残っているのは」

その足で向かった総長室では、
その時間所用で不在の阿部三郎理事
長（総長代行）に代わって、長内教
授と程島俊介事務局長らが応接した
（角田邦重学長は中国・北京に渡航
中だった）。

寄贈本―「改めて親の気持ちをし」

《図書館で》

図書館資料室に2冊の本が置かれていた。祐木子さんが、安明進著『北朝鮮拉致工作員』の表紙裏の署名を指して、二人で眺める。

《寄贈／拉致された中大生／蓮池薫 父／蓮池秀量》とあった。これは平成10年8月10日、もう一冊（石高健次著『これでもシラを切るのか北朝鮮』）は同12年4月27日、父親が寄贈したものである。

「本にこめられた親の気持ちを改めて感じました」と、薫さんは神妙な表情になった。

2階に上ると、職員が昨年10・15の帰国を伝える韓国の「朝鮮日報」「東亜日報」2紙を示しあと、「復学の折はぜひご利用ください。図書館は夜10時までやっておりますから」と声をかけた。

学食騒然―コロッケカレーと

コーンラーメン

移動するに連れて歓声が高くなった。そのピーク、正午からの学食での食事の時間――。

《学食にて》

1階レストランコープに高い壁ができた。報道カメラの列。新聞、テレビ各局、それに週刊誌、写真週刊誌も……50人を上回るか。外には、ガラス越しにのぞきこむギャラリイ大勢。これで、ノドを通るだろうか、おふたりは。

ショーケースに並ぶメニューの多さに驚きながら、薫さんが「救う会」の渡部さんに聞いた。

「100円のカレーはないんですか」
カレー大好き。25年前がその値段だったらしい。そうはいかないが、いまも中大の学食カレーは激安270円から。薫さんは300円のコロッケカレーに。祐木子さんは、学食自体が初体験。「どうしよう。おとうさん何にする?」。迷った末に、コーンラーメンを。こちらも300円。個々に食券を買い求め、食堂の中へ。

「エー蓮池さん?」
「本物だよ!!」

学食、騒然。学生たちはみな振り返り、ケータイを取りだして友だちに知らせたり、写メールの準備をしたりする人も。

お盆をとって、蓮池さんが「丼物」

コーナーに並ぶと中のおばちゃんたちも集まってきて、

「がんばってくださいね!」
励ましの声をかける。

「はい。ありがとうございます」
笑顔でお辞儀する蓮池さんも大変である。カウンターには色とりどりの花が生けられていた。普段は見慣れないから、きょうのために用意されたものだろう、きつと。容器がお弁当のバックなのはさておき、学食スタッフの温かい心づかい。

喧噪の中を縫ってようやく全員が揃い、食事が始まった。カメラのシャッターの音がいつそう激しくなった。フラッシュもまぶしい。そんな中、カレーを一口食べて、

「おいしい!」
と蓮池さん。25年前のカレーとは味も向上したようである。

「ちよつと辛くなったかな」
確かに。中大のカレーには、鷹の爪が入っています。おいしそれに、ボリウム満点の一皿を完食。心配なかったようである。

報道陣が「頭撮り」だけで次の撮影地点に移動してもギャラリイは増えるばかりだが、一同は和やかな雰

囲気になり、みんな写真をとったりして笑顔の会話がつづいた。

外から手を振る学生に対して、薫さんは大きく手を振り返す。ごくふつうの、先輩と後輩の交歓のように見えた。

素顔の蓮池さん

40分ほどで食事をすませ、8303教室を見る。印象は?「そんなことで司法試験に通るか、と先生にハツパをかけられたことを思い出しました」

6204教室に移って、やっど休憩タイム。メディア抜きにくつろぎ。「救う会」のメンバーを相手に大いに語り、笑った。本誌だけの特報である。

《6204教室オープン》

教室内には10人くらい。薫さんは5列目ほどの席に、その後ろに祐木子さん。透さんは一段高い教壇から教室全体を見渡している。学生の一人在「透さん、先生みたいですね」というと、黒板消しを手に取り、

「こらー、何寝てんだ」
と言いながら投げふるふりをしておどけた。それまでとはうって変わっ

て、教室全体が明るい。

薫さんは学生と談笑にふける。

「昔は1クラスに女の子が1人くらい割合だったんだ」

「今は7—8人くらいですかね」

ほう、とファンタオレンジを飲みながら談笑する薫さんを、祐木子さんがカメラに収めている。

「私は大学と関係ないから行きづらい」なんて言っていたけれど、来たら結構はしゃいでるじゃん」と薫さんに言われると、

「いらぬこと言わないですよ」

と祐木子さんが返す。ごく自然な夫婦の会話だ。

麻雀の話。「駿河台のときはいつもやってたよ。でもこっちに校舎が移ってからは周りに雀荘がなかったからねえ」と楽しげに。

「そういうえば、みんな何年生なの」と薫さん。一人が、「僕は今年5年生です。中国語の巻き舌の発音ができなくて、単位を落としてしまったんです」と答えると、すかさず、

「麻雀をやっていないからだよ」

爆笑である。

「駿河台から校舎がこっちに移動したとき、正直来るのが面倒だった

よ」と多摩を振り返る。「少しづつ来なくなったような……」

「(救う会は) どういった運動をしているんですか」と尋ねた。白門祭でピラ配りをしたり、署名活動、また外務省に訴えに行ったこともあるという説明に耳を傾けて、蓮池さんは話した。「ありがたいです。うちの両親が1日署名しても1人か2人しか署名してくれない日もあったって。死んだって思えば楽なんだろうけど、親が信じないでだれが信じるという気持ちでやってたと親父が言ってた。法学部教授会の『学籍回復』の決定が本当に力になったと。

きょうも長内先生とは初めてなのにすぐに親しくなった。娘が21とか22くらいだから(君たちとも)へだたりがないし。きょうは本当によかったです」

気持ちをごめて、続けた。「うちのおふくろにハッパかけられたんです。やっぱり(親の前だと)弱音が出ちゃう。子供のこととか。『しっかりしろ。たかが何カ月会わないくらいで何言ってるんだ』って。力になりますね。母は強しってことですかね」

メディアでは一度も見たことのない、「素の」蓮池薫さんが見えたようであった。

「通信教育で復学」の道より具体的に

父・秀量さんは、「息子にはぜひとも復学してほしい」と改めて語った。ふたりの上京を前にした11日である。13日夜の「ニュース・ステーション」などは翌日の母校訪問を伝えながら「復学決定」と「飛ばし」た。

しかし、母校訪問の主題が「通信教育過程での復学」の模索であったのはたしかだった。法学部長室では、より具体的に、重要な話し合いがもたれた。

《法学部長室》
午後2時すぎ。永井和之法学部長らの「お帰りなさい」という出迎えに蓮池薫さんは深く頭を下げた。

グローバル化のなかでアジア地域での法律の標準化の課題などを視野に入れて法学部も大きく変わっていくことを話しながら、学部長は「復学や通信教育、アジアの姿を探すプランニングが中大にはありますよ」

と持ちかけた。

「中大を卒業してほしいという両親の強い気持ちはもちろん、私としてもありますが、これからの子供たちのこともありますし、生活基盤のこともあります。現実的問題として今すぐというわけにはいきませんが」と蓮池さんの現時点の考えは変わらないが、「通信教育の資料を見せていただけますか」とみずから申し出て、話向きは具体的になった。

井上彰通信教育部長が、「ここに在学中の成績表がありますが」と原簿を見ながら、「蓮池さんは76単位くらい履修しています。通信教育ですと、卒業8単位と残りが64単位くらい。科目数でほぼ16科目とれば卒業の要件を満たすことになります」と説明に移る。通信教育は自宅にいながらも単位取得が可能なこと。

約6000人ほどが学んでいること。「この前、84歳の方が卒業したんですよ。70歳以上の卒業生もいます。45歳なんてまだ若造ですよ」

蓮池「いやあ、そうですね。大学を1度出た人たちなんですか」

永井「大学を出ている人もいますし、出ていない人もいます」

蓮池「通信教育は2年間とか期間
は決まっているんですか」

永井「いや、そんなことはありませんよ。大学は最長8年。蓮池さんの場合は3年の前期でしたから6年ほど残っている。はじめから2年で卒業するという大変ですから、楽な気持ちで徐々に慣れていくのが一番いいのではないですか。薫さんは在学中の単位が役に立ちますから、3年に戻るといふ感じでしょうか。4月が大変でしたら、9月に始めるという手もあります」

そうですか、ときりにうなずいた。気持ちが楽になった、というように。本人が一番気にしていた部分だったのかもしれない。

資料と合わせ、「教科書も見せましょうか」と話が進むと、透さんが言った。「それは、刑法がいい」

『刑法Ⅰ』『刑法Ⅱ』『刑事政策』、それに永井学部長から贈られた商法の自著を手に、部屋を辞した。30分前のやや硬い表情が消えていた。

「本人も意欲的で前向きに検討したいというのをひしひしと感じました」(同席した宮崎寛法学部事務長)

「入った瞬間、ジーンときた」

続く長内前法学部長との時間。

98年6月、母・ハツイさんと会い、その思いの深さが教授会の「学籍回復」方針へつながった法学部長当時の事情をめぐりながら、ここでも「復学」話になった。長内教授は通教部長をつとめたこともある。

長内「通信教育のいいところは、いつからでも始められること。しかし半面、卒業率は約10%と勉強は大変ですよ。週15時間から20時間は勉強に割かないと。卒業証書を手にするためには、きちんと勉強してもらいますよ」

薫「はい」

長内「多摩キャンパスを訪ねてみて、どうですか」

薫「心がなごみました。来てよかったです。懐かしい、というか学校に入った瞬間に胸にジーンときました。卒業こそできませんでしたが、席を置いた学生として皆さんが暖かく迎え入れてくれたことが非常にうれしいです」

透「私が以前に訪れたときも(昨年12月の講演会)、学生の皆さんが

弟のことを「先輩」として関心を示してしてくれたことをうれしく思いました」

日本は自由の国、自分の意志で

長内教授は最後にこう語りかけた。薫さんから、『こうしてくれ』

と頼まれたわけではありませんが、われわれはできる限りサポートしていくつもりです。ここは自由な国だから、自由に意志を決められる国だから、復学のことよく考えて、自分で決めてください。日本は自由な国です。自分で、自分の意志で決めればいいですよ」

3時半からのプレス会見で薫さんは「心にしみる言葉だった」と語った。「復学について奥さんの気持ちはどうですか」との報道陣の問いに、祐木子さんは「義父の強い希望です、私も陰で支えていこうと思います」と話した。

「復学」への大きな地均し、一歩進んだことは間違いない。

終わりの宴—認識新たに

午後4時。5時間滞在して、帰りはモノレールで高幡不動ま

で。これで終わったわけではない。6時半から場所を駿河台記念館に移して、夕食パーティーが待っていた。

《駿河台記念館》

阿部理事長はいさつものなかで、「本来なら昭和55年(80年)卒業生として一昨年のホームカミングデーのメインゲストでした。ことしのホームカミングデーにぜひいらしてください」と述べた。中大出身の経済人でつくる「南甲倶楽部」からは箱根駅伝応援の帽子とジャンパーなどが贈られた。特別に蔵出しの酒も。中央大学らしい、「滋味」がしみわたるような宴である。鈴木康司前学長「救う会」の前代表幹事らのあいさつ、逸話の披露が続いた。

パーティーの半ば、薫さんと祐木子さん拉致事件の、この間の報道を再編集したテレビ新潟の映像も流された。両親と兄、家族の叫びと必死さが凝集されて伝わってくる。それをふたりとともに見る。場の共有が、理不尽な悲劇への認識を新たにさせる。学生の想像を超える共感もそうだったろう。蓮池さんの「25年ぶりの来校」は、大学にとっても大きかつ

たのである。

蓮池さんがあいさつに立った。「きようはこんなに歓迎していたでいて、涙が出るような思いです。がんばります。ありがとうございます。さようまで」

それをうけて、締めくくりに長内教授。「駕籠に乗る人、担ぐ人、そのまたワラジを作る人——という言葉葉がありますが、それぞれ立場で、できる範囲で蓮池さんを最後まで支えていきたい。みなさんもお力を」

「救う会」の渡部さんが「一本締め」と声をかける。「まだお子さんの帰国、他の拉致被害者の問題も解決していません。三本締めはお子さんが帰ってきたときに。一本締めでいきましよう」

夜8時半を回っていた。

翌日には蓮池夫妻と兄・透さんは東京ドームでのローリング・ストロークスのライブ公演に出かけた。見終えて、ロック青年だったところが蘇ったように、薫さんが「思わず体が動きました」と語る映像がテレビに流れた。

16日 夫妻は柏崎に帰った。



祐木子さんと語る

駿河台記念館でのビデオ映像に事件の重大さ、悲劇の大きさを再認識しながら、蓮池さん夫妻がいま自分と同じ空間にいるということが、わたしにはただの偶然とは思えなかった。

実はわたしの父親は、柏崎高校出身で蓮池薫さんと同級生。しかも自分自身も柏崎市出身なのだ。そのことを思い切つて告白してみることにした。すると薫さんは

「へえ。ハッコウ！」

目をまん丸くして驚いた。

「ハッコウ」とは柏崎高校の通称である。

そして父の実家の地名を告げると、薫さんは慌てて祐木子さんと呼んだ。

「エーッ、そうなの！」

同じく目を丸くした。

「でも、蓮池さんとは直接の面識はないそうなんです……」

「帰つて名簿を見れば、分かるわよ。お名前は？」

祐木子さんは、久しぶりに会った

親戚のおばさんみだ。

「いまいくつなの」

20歳だと言うと、

「そう。学校はたいへんでしよう。将来は記者になるの」

きょう、報道陣のイクサ（戦）並みの現場を見て、わたしはこの職業、自分には向いていないのだと自信をなくし始めていた。

「まだ分からないですけど、きょうの訪問はさぞお疲れでしょう」

あのメディアの大群にはこっちは

だつて疲れた。

「人が本当に温かくてね、法学部長さんのお話聞いたときなんて思わず涙がこみ上げてきちゃったわ」

本当に来てよかつた。そして、

「記者つて素敵な仕事よ。がんばつてね」

励まされたのはこちらの方だった。

「御馳走、食べていないでしょ」わたし、先ほどから写真ばかりに夢中で、ほとんど食べていなかったのだ。こんどは心配されてしまった。話していくうちに、なんだか母親と話しているような気分になつてきた。そういえば、祐木子さんにはわたしと1つ違いの娘さんがいる。離れ離れの状態が続く中、子供たちのことを思わない日はない、そうだろうと思う。

「こんど、柏崎に来ることがあったらうちにも寄つてね」

祐木子さんはわが子を見るような眼でわたしに言った。

（学生記者 江部理恵 法学部3年）